

パブーのフォントサイズテスト本

作者：大臣

概要：フォントサイズ（1～7）をお試しする本。主に自分用ですが、こんな感じで出ますよーってのを確認してみてください。※文章は当方の別の作品より引用。

小説として

PCでの表示

フォントサイズ2～4が適正サイズな印象。

ただ、ブラウザに大きく左右されるので、細かい調整は読み手側で行う必要があるそう。
書き手として設定しておくのは、サイズ3（デフォルト）がやはり一番ベターかもしれない。

iPhone/iPod touch/iPadでの表示

ePubファイルをDL→iTunesへ突っ込む→同期、という方法を取る（OSバージョン4.0以上）。
やや小さめだが「小説らしい」のは、サイズ2。サイズ3だと1ページの文字数が若干少ない印象

。ただこちらもブラウザ同様、サイズを読み手側でいじれるので、最終的にはユーザーマター。
取り敢えずサイズ2に設定しておくのは一つの選択肢。

iPadでも同様。

もし絵本にする場合は、サイズ5または6が見やすい印象。

フォントサイズ1

夜明けの空、窓の外を見上げると二つの月が浮いている。

一方は太陽ほどではないけどゆっくりと角度を変えていって、またもう一方は、どうしてそんなに急いでいるのと聞きたくなるようなスピードで沈んで行く。急いで進む近月は日に二度も、昇っては沈む。まるで遠月に見せつけているみたいだった。

そんな毎日毎日繰り返される、亀と兎の徒競走をじっと見つめていても、面白味が湧くということはない。けどなんとなく見入ってしまうのは、マスターいわく「二人を応援したくなるから」らしい。わたしにはそんなつもりなんて全くないのだけど、そうさせる何か、不思議な魔力でも発していることなんだろうか。

もう一度空を見上げる。既に明るく白んできている東の空から、今日もまた太陽が顔を見せる。二つの月よりもゆっくりとした速さで、でも確実に顔を出していった。

このままぼんやりとしていても二度寝してしまうだけなので、わたしは寝所を抜け出ていつもの制服に着替えることにした。

フォントサイズ2

夜明けの空、窓の外を見上げると二つの月が浮いている。

一方は太陽ほどではないけどゆっくりと角度を変えていって、またもう一方は、どうしてそんなに急いでいるのと聞きたくなるようなスピードで沈んで行く。急いで進む近月は日に二度も、昇っては沈む。まるで遠月に見せつけているみたいだった。

そんな毎日毎日繰り返される、亀と兎の徒競走をじっと見つめていても、面白味が湧くということはない。だけどなんとなく見入ってしまうのは、マスターいわく「二人を応援したくなるから」らしい。わたしにはそんなつもりなんて全くないのだけど、そうさせる何か、不思議な魔力でも発してるということなんだろうか。

もう一度空を見上げる。既に明るく白んできている東の空から、今日もまた太陽が顔を見せる。二つの月よりもゆっくりとした速さで、でも確実に顔を出していった。

このままぼんやりとしていても二度寝してしまうだけなので、わたしは寝所を抜け出ていつもの制服に着替えることにした。

フォントサイズ3

夜明けの空、窓の外を見上げると二つの月が浮いている。

一方は太陽ほどではないけどゆっくりと角度を変えていって、またもう一方は、どうしてそんなに急いでいるのと聞きたくなるようなスピードで沈んで行く。急いで進む近月は日に二度も、昇っては沈む。まるで遠月に見せつけているみたいだった。

そんな毎日毎日繰り返される、亀と兎の徒競走をじっと見つめていても、面白味が湧くということはない。けどなんとなく見入ってしまうのは、マスターいわく「二人を応援したくなるから」らしい。わたしにはそんなつもりなんて全くないのだけど、そうさせる何か、不思議な魔力でも発してるということなんだろうか。

もう一度空を見上げる。既に明るく白んできている東の空から、今日もまた太陽が顔を見せる。二つの月よりもゆっくりとした速さで、でも確実に顔を出していった。

このままぼんやりとしていても二度寝してしまうだけなので、わたしは寝所を抜け出ていつもの制服に着替えることにした。

フォントサイズ4

夜明けの空、窓の外を見上げると二つの月が浮いている。

一方は太陽ほどではないけどゆっくりと角度を変えていって、またもう一方は、どうしてそんなに急いでいるのと聞きたくなるようなスピードで沈んで行く。急いで進む近月は日に二度も、昇っては沈む。まるで遠月に見せつけているみたいだった。

そんな毎日毎日繰り返される、亀と兎の徒競走をじっと見つめていても、面白味が湧くということはない。けどなんとなく見入ってしまうのは、マスターいわく「二人を応援したくなるから」らしい。わたしにはそんなつもりなんて全くないのだけど、そうさせる何か、不思議な魔力でも発しているということなんだろうか。

もう一度空を見上げる。既に明るく白んできている東の空から、今日もまた太陽が顔を見せる。二つの月よりもゆっくりとした速さで、でも確実に顔を出していった。

このままぼんやりとしていても二度寝してしまうだけなので、わたしは寝所を抜け出ていつもの制服に着替えることにした。

夜明けの空、窓の外を見上げると二つの月が浮いている。

一方は太陽ほどではないけどゆっくりと角度を変えていって、またもう一方は、どうしてそんなに急いでいるのと聞きたくなるようなスピードで沈んで行く。急いで進む近月は日に二度も、昇っては沈む。まるで遠月に見せつけているみたいだった。

そんな毎日毎日繰り返される、亀と兎の徒競走をじっと見つめていても、面白味が湧くということはない。だけどなんとなく見入ってしまうのは、マスターいわく「二人を応援したくなるから」らしい。わたしにはそんなつもりなんて全くないのだけど、そうさせる何か、不思議な魔力でも発しているということなんだろうか。

もう一度空を見上げる。既に明るく白んできている東の空から、今日もまた太陽が顔を見せる。二つの月よりもゆっくりとした速さで、でも確実に顔を出していった。

このままぼんやりとしていても二度寝してしまうだけなので、わたしは寢所を抜け出ていつもの制服に着替えることにした。

。

夜明けの空、窓の外を見上げると二つの月が浮いている。

一方は太陽ほどではないけどゆっくりと角度を変えていって、またもう一方は、どうしてそんなに急いでいるのと聞きたくなるようなスピードで沈んで行く。急いで進む近月は日に二度も、昇っては沈む。まるで遠月に見せつけているみたいだった。

そんな毎日毎日繰り返される、亀と兎の徒競走をじっと見つめていても、面白味が湧くということはない。だけどなんとなく見入ってしまうのは、マスターいわく「二人を応援したくなるから」らしい。わたしにはそんなつもりなんて全くないのだけど、そうさせる何か、不思議な魔力でも発してるということなんだろうか。

もう一度空を見上げる。既に明るく白んできている東の空から、今日もまた太陽が顔を見せる。二つの月よりもゆっくりとした速さで、でも確実に顔を出していった。

このままぼんやりとしていても二度寝してしまうだけなので、わたしは寝所を抜け出ていつもの制服に着替えることにした。

夜明けの空、窓の外を見上げると二つの月が浮いている。

一方は太陽ほどではないけどゆっくりと角度を変えていって、またもう一方は、どうしてそんなに急いでいるのと聞きたくなるようなスピードで沈んで行く。急いで進む近月は日に二度も、昇っては沈む。まるで遠月に見せつけているみたいだった。

そんな毎日毎日繰り返される、亀と兎の徒競走をじっと見つめていても、面白味が湧くということはない。だけどなんとなく見入ってしまうのは、マスタ

—いわく「二人を応援したくなるから」らしい。わたしにはそんなつもりなんて全くないのだけど、そうさせる何か、不思議な魔力でも発してるということなんだろうか。

もう一度空を見上げる。既に明るく白んできている東の空から、今日もまた太陽が顔を見せる。二つの月よりもゆっくりとした速さで、でも確実に顔を出していった。

このままぼんやりとしていても二度寝してしまうだけなので、わたしは寢所を抜け出ていつもの制服に着替えることにした。